

探究の連続発展を軸とする授業づくり

－高等学校「世界史B」の授業づくりを一事例として－

県立斑鳩高等学校 教諭 祐岡 武志

Yuuoka Takeshi

要 旨

本研究は従来の講義中心の授業にかわり、生徒が「探究」することに主眼をおいた授業づくりを目指すものである。生徒が自ら抱いた疑問を探究し、その探究結果の発表内容を生徒相互に検討させることでさらに新たな疑問点を抽出し、次なる探究に向かわせることがこの授業の目的である。具体的には高等学校世界史Bのカリキュラムの中で、生活史の観点で食文化の交流を取り上げる授業を構想し、研究授業を通してその有効性を考察した。

キーワード： 探究、世界史Bの授業づくり、生活史、食文化の交流

1 はじめに

高等学校における地理歴史科の授業は、知識偏重の学力観に基づく知識詰め込み型の授業になりがちである。テストも知識の暗記を問う形式が多く、こうした授業や評価の在り方からどう脱却するかが課題といわれている。

確かに従来の歴史教育では、教員が一方向的に講義をし、生徒がその内容を学ぶスタイルが定着している。これは高等学校の世界史にも当てはまり、生徒は教員の講義を聞き、板書事項をノートに書き留めるといった学習活動に終始している。また、知識の量と正確さを問うテストが行われ、生徒は考査前に教えられた内容を覚えこむことに多くの力を費やしている。これでは世界史は単なる暗記科目でしかなく、本来目的とする、歴史的なものの見方や考え方を培う授業とは言い難い。

本研究ではこのような講義中心の授業を見直し、生徒の主体的な探究に連続性をもたせることにより、歴史に対する興味・関心をもたせ、歴史的なものの見方や考え方を培うことができる授業の在り方を構想する。そして研究授業の実践と分析により、この授業構想の有効性を考察する。

2 研究目的

教員が講義をして生徒がその内容を学ぶ従来の授業にかわり、生徒が自ら疑問点を探究し発表することで新たな探究のテーマを生み出すような、探究の連続発展を軸とする授業の在り方を模索する。

3 研究方法

- (1) 生徒自身による探究と、生徒相互の学び合いを重視した授業の構想
- (2) 研究授業結果の分析に基づく、探究の連続発展を軸とする授業の在り方の考察。

4 研究内容

(1) 高等学校の現状

そもそも高等学校の地理歴史科では、知識を教え込むことに授業時間の大半を費やさなければ内容の全範囲を消化できないと思われている。そして、効率よく内容を伝達することを最優先にすれば、授業形態は自ずと教員による一方的な「しゃべり」中心の講義形式になってしまう。この状態では思考・判断する場面を設定することはもちろん、地理歴史科にとって大切な資料やデータの読み取りの時間も不十分となる。このような現状を改善するには、思考・判断する場面や、資料やデータの読み取りの時間を確保することを意識して授業を構成することが求められる。

高等学校学習指導要領においては、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ることを重視している。世界史では内容の(1)で「世界史への扉」が新たに設けられ、身近なものや日常生活にかかわる主題、我が国の歴史にかかわる主題など、適切な主題を設定し追究する学習を通して、歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高めるとされている。この趣旨からも、生徒の日常生活にかかわる食文化を授業で取り扱うことは重要であり、この生活史の観点で授業を構成することで、日々の授業で生徒に思考させたり、判断させたり、表現させたり、資料を活用させたりという多様な場面の設定が可能になる。

(2) 授業づくりのスタンス

高等学校の地理歴史科の科目では、文字資料やデータ・グラフから読み取り、それを基に社会事象を理解したり思考することがより重要になるが、それは生徒の発達段階からしても利にかなったことである。高校生の年齢ともなると、事象の背景などを科学的に分析したり、現象と原因をつなげて考える因果関係の理解ができるようになる。また、中学校までの学習活動により、程度の差こそあれ、生徒は一定の情報を系統的に保持しているのである。この生徒がすでにもっている知識を活用することが、探究に基づく授業づくりのねらいである。

従来の講義中心の授業では、教員が教材を通して生徒に一方的に知識を伝達する形式をとっている。この状態では知識の流れは教員から生徒への一方通行であり、生徒は教員の指示に従って内容を詰め込むだけである。これでは生徒が授業の中で思考・判断する機会はほとんどないといえる(図1参照)。

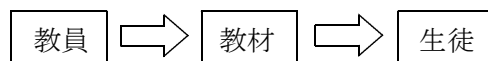


図1 講義中心の授業における知識の流れ (→が知識の流れを表す)

これに対して、生徒の探究を重視する授業では、生徒が独自に教材を見つけることになる。もちろん、教員の助言や補助が必要なのはいうまでもないが、この形式では、生徒と教員の双方が主体的に教材とかかわることになる。この ← のプロセスが「探究」である(図2参照)。

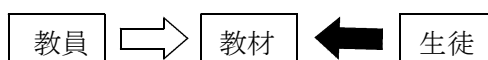


図2 探究を取り入れた授業における知識の流れ

しかし実際は、1クラスが40名程度であるので生徒がかかわる教材も複数となり、授業の中の「探究」は更に複雑なものとなる。ここでの問題点は、「探究」が複雑になることで、まとまりのない調べ学習になることである。テーマを設定して調べ学習を行っても、調べた内容を発表するだけで終わってしまう授業が多く見られる。これではせつかくの「探究」活動も深まりのないまま終わることになる。そこで、本研究においては探究が発展することを重視し、探究した内容をさらに次の探究につなげる連続性をもたせることを試みた。この探究の連続発展のプロセスが、生徒に歴史的なものの見方や考え方をもちこたせることに有効であると考えられる。

今回提案する授業では、グループで探究した成果を発表させ、発表内容を生徒に評価させることで新たな疑問点を抽出する。生徒は他の生徒の発表からも学ぶことになり、ここでは生徒相互による学び合いの状態が生まれる。これを図式化したものが図3であり、 \longleftrightarrow が生徒相互による学び合いを表す。この学び合いから生まれた疑問が次の探究へと発展し、連続性が生まれることになる。

従来は一方的に教える側であった教員は、生徒の学び合いに補助者としてかかわることで、生徒から学ぶことにもなる。これは従来の教科内容優先、知識・理解のみに偏りがちだった高等学校の授業観に、「生徒=学ぶ側」の視点を取り入れるものとなる。

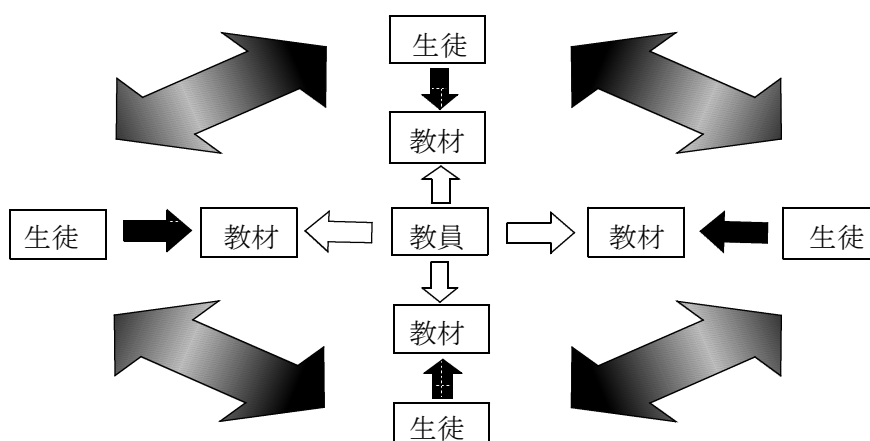


図3 探究成果の発表を取り入れた授業における知識の流れ

(3) 授業プランの構想

本研究では上記の観点に基づき、以下のように単元を設定して授業案を構想した。この単元は普段の世界史Bの授業の中に、テーマ学習として設けたものである。

ア 単元 ヨーロッパ勢力の海外進出

イ 単元のねらい

- (ア) ポルトガルのインド航路開拓をはじめとするスペインとポルトガルの大西洋進出が、ヨーロッパ世界の主導による世界の一体化のはじまりであることを理解させる。
- (イ) スペインとポルトガルにより新大陸が植民地化されていく過程を理解すると同時に、新大陸と旧大陸の関係について興味・関心をもたせる。
- (ウ) コロンブスの新大陸到達をきっかけとして、新旧両大陸相互で人や物の移動がおり、その後の世界に大きな変化を及ぼしたことを具体的に探究させる。

ウ 単元の指導計画 ヨーロッパ勢力の海外進出（全7時間）

次 程	内 容	時間数
第一次	インド航路の開拓	1時間
第二次	アメリカから太平洋へ	1時間
第三次	商業・植民活動の展開	1時間
第四次	世界の変化（食文化の変化）	全4時間
	第1時 新大陸原産の食物（ジャガイモとトマト）〔ビデオ視聴〕	1時間
	第2時 その他の新大陸原産の食物〔探究テーマの設定〕	1時間
	第3時 その他の新大陸原産の食物〔発表準備〕	1時間
第4時	その他の新大陸原産の植物〔発表と疑問の追究〕	1時間〈本時〉

エ 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アジアとの関係に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アジアとの関係について考察し、その歴史的意義を判断している。	16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アジアとの関係に関する資料を活用するとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現している。	16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アジアとの関係について理解し、その知識を身に付けている。

オ 「ヨーロッパ勢力の海外進出」の評価規準の具体例

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
① 大航海時代の新大陸と旧大陸の関係について関心をもつ。 ② 発表学習に興味をもち、意欲的に発表準備にかかわろうとする。 ③ グループ発表を中心としたディスカッションに、積極的に参加する態度をもつ。	① 現代の観点から、大航海時代以降の世界の変化を歴史的に考察することができる。 ② モノの移動とそれにともなう社会の変化から、ヨーロッパ中心の歴史認識を相対化する歴史的なものの見方や考え方を身に付ける。	① グループ内での協調に心がけ、発表内容の充実を図る。 ② 自分の意見を整理し、相手に正確に伝えるために工夫する。 ③ 他人の意見を聞き取り、自分の意見との相対的な比較ができる。	① ヨーロッパの太平洋進出が世界の一体化のはじまりであることを理解する。 ② 16世紀にはじまる世界の一体化は、新旧両大陸相互に大きな変化を及ぼしたものであることを理解する。

カ 授業の流れ

(ア) 【第四次・第1時】

コロンブスの新大陸到達をきっかけとして、新旧両大陸相互で人や物の移動がおり、世界が大きく変化したことをビデオ視聴により学習する。この人や物の移動の中で特に食物に着目し、新大陸原産の植物が、その後の世界の食文化にどのような変化をもたらしたのかを考えさせる。

(イ) 【第四次・第2時】

ビデオでは新大陸原産の植物の中でジャガイモとトマトを取り上げているので、ジャガイモとトマト以外の新大陸原産の食物を生徒に調べさせる。4人か5人程度のグループを8グループつくり、互いに調べた内容を持ち寄り、検討させることでグループのテーマを設定させる。

(ウ) 【第四次・第3時】

設定されたテーマにそって各グループで研究させ、発表準備を整える。発表の形式は自由だが、聞き手が興味をもてるものになるように工夫させる。なお、探究の時間を確保するため発表時間は5分程度とし、4グループずつ2回に分けて発表することとする。

(エ) 【第四次・第4時】〈本時〉

聞き手は、発表を聞いて疑問に残ったことを各グループ内で出し合い、グループごとに「問い(疑問点)」を整理していくことをディスカッションの目標とする。

授業の最後に、まとめられた「グループの問い」を黒板に掲示する。グループ同士で問いに対する答えを検討しながら、「グループの問い」に答えていく。すべての「問い」に対する答えが導き出される必要はなく、次への探究のきっかけとしてオープン=エンドで疑問を残して授業を終了してもよい。

5 研究結果と考察

本研究においては、上記「カ 授業の流れ」の「(エ) 【第四次・第4時】〈本時〉」を研究授業とした。実際には、さらに1時間をかけて残りの4グループの探究会を実施することになった。

(1) 探究の意義

今回の授業づくりでは、日常の授業の中で探究活動を取り入れたことに意義がある。普段は講義中心の授業を余儀なくされているが、時間を確保し、生徒を活動させることの重要性を改めて感じた。【第四次・第3時】では発表準備のための調査を行ったが、すべてのグループが授業時間の中だけでは不十分で、昼休みや放課後を利用して準備を行った。授業では図書室を利用したが、蔵書が限られているので、筆者が複数の図書館で集めた資料も利用させた。しかし、生徒は筆者が予想しない本を活用し、独自のプロセスで発表資料をまとめていった。改めて生徒の活動の幅広さを思い知らされた。中には、こちらの予想を上回る資料を見付け出し、生徒に教えられる場面さえあった。

(2) 新たな探究へ

研究授業は『世界史「どうして？」探究会』と命名し、単なる発表会ではないことを生徒に意識付けた。「なぜ?」「どうして?」の疑問を重視し、聞き手が興味をもつような発表を期待したからである。研究授業における発表グループのテーマは以下の4つである。

- ①『カカオの歴史』
- ②『ヘビースモーカー』
- ③『カカオ』
- ④『Secret of Tougarashi』

持ち時間は各グループ5分以内であったが、オーソドックスに模造紙に調査結果を発表をするグループもあれば、OHCを活用し

て写真を提示するグループもあった。また、クイズ形式で発表したグループは授業参観に来ていた教員に質問を投げかけ、探究会を盛り上げていた。生徒は発表を楽しみ、よい雰囲気



写真1 発表の様子

進んだ。



写真2 OHC活用の様子



写真3 研究授業の様子



写真4 新たな疑問の抽出

研究授業の後半は、4つのグループの発表に対する疑問点をまとめる場面である。まず、生徒個人の疑問点をワークシートにメモさせ、次にグループ内で意見交換の後、各グループごとに1つの疑問にまとめさせた。こうして8つのグループすべての疑問点がそろった状態が写真4である。どんな疑問が飛び出すか不安はあるが、疑問を次への探究につなげていく作業がおもしろい。例えば、『ヘビースモーカー』のグループのクイズで、「江戸時代の日本でタバコ禁止令が出た理由は何か?」というものがあつた。答えは「火事の防止のため」であるが、これに対してあるグループから「いつまで禁止令が続いたのか?」という疑問が出た。この新たな疑問を生徒と一緒に考えていると「それじゃあ、他の国ではどうだったのか?」と、さらに疑問がふくらんでいった。これが新たな探究に発展していくプロセスである(図4参照)。

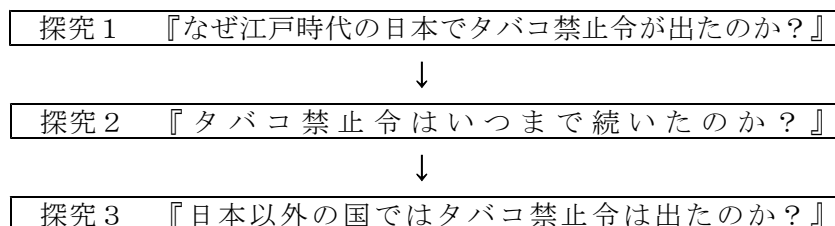


図4 探究の連続発展

6 今後の課題

研究授業の中で生まれた疑問は、すでに生徒がもつ知識・理解を背景としたもので、生徒が独自のスタンスで授業に取り組んだ結果といえる。これ以降は「生徒＝考える側」を中心に探究活動が続くことになる。今回は普通の授業の中でテーマ学習として組み込んだものであるため、連続性については限界があつた。しかし、生徒に歴史的なものの見方や考え方を培う方策としては有効なものであつたと考える。今回の授業づくりの結果、普通の授業の中でも「なぜ?」と生徒に考えさせる時間を確保することの大切さを再認識した。「問うこと」を意識した日々の授業の積み重ねの中で、探究心をもった生徒が育まれていくのである。

参考・引用文献

- | | | | |
|-----------------------|-------------|----------|------|
| (1) 鈴木亮 | 世界史学習の方法 | 岩崎書店 | 昭52 |
| (2) シルヴィア・ジョンソン 金原瑞人訳 | 世界を変えた野菜読本 | 晶文社 | 1999 |
| (3) 日本農芸化学会 | 世界を制覇した植物たち | 学会出版センター | 1997 |